

「はじめに言があった！」

(ヨハネによる福音書1:1-18)

今日の福音は、「ロゴス賛歌」といわれる箇所です。賛歌ですから、喜びに満ちた人の叫びです。「ロゴス」とは「言」のことです。ヨハネによる福音書はこの「言」を通してこそ、人は時を超え、空間を超えて主イエスと出会えるということを伝えています。しかも、「ロゴス=言葉」なる御子は、受肉したのです。ですから、時空を超えて叶えられる「言」なるイエスとの出会いとは、単なる空想や、「出会った気がする」といったようなものではなく、確かに「あなたと出会った」という身体性を伴う実感として起こる、ということなのです。ヨハネによる福音書は、主イエスに直接会ったことがない人々によって記されました。しかし、この福音書が証言することは、「わたしたちは、み言葉を通して主イエスに出会った！それも、たしかにこの手で触れて個の目で見えるように出会ったのだ！」というものなのです。それゆえ、この福音書の始まりである今日の福音は、「言」なる主イエスと出会えることの喜び、賛美に満ちて始まるのです。その驚き、そして喜びの道があなた方にも、御子によってもたらされるのだ、という歓喜こそが今日の福音には満ちているのです。

創世記によれば、わたしたちはもともと、神に似せて創造されています。けれども、いくら似てはいても、わたしたちは神ではありません。完全ではありませんから、正しい道を進んでいると思っていても、いつの間にか道からズレてしまいます。このズレが、わたしたち人間の「罪」と言われているものです。「罪」とは、ギリシャ語の原文ではハマルティアという単語です。たとえば弓矢の競技での的を外れた時、審判は「ハマルティア！」と叫びました。「的外れ」ということです。的を狙って矢を放っても、手元での数ミリのズレが的に到着する頃には大きなズレになります。それこそが、わたしたちの「罪」だということです。神に向かっていると思って、完全に正しい道がわからないから、少しずれてしまう。そして、気がついてみたら大きく神さまから離れてしまうのです。

人間はそのような存在ですから、いよいよ神さまとの距離が離れてしまい、もはや自分たちがどのように歩めばいいのか、どうすれば救われるのかわからなくなってしまうました。それが、イエス様がお生まれになった頃のイスラエルの人々の苦しみです。しかしこの苦しみは当時の人々のみならず、今を生きるわたしたちの辛さでもあります。どう生きれば、歩めばいいのか。わたしたちもさまよいます。完全に正しい道など分かりえないのです。しかし神は、さまよい、神

から離れ、苦しむ人間の叫びを聴かれました。わたしたちのために御子を遣わし、真理への道を与えてくださったのです。

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」この世界を創造した神の言、神の意志であり、神そのものである言。神そのものが、わたしたちとおなじ「肉」となれた。なぜなら、それは今日の福音の最後にある通りです。「いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。」神から離れてしまい、神のことが分からなくなってしまったわたしたちのために、完全なる神が完全なる人として「わたしたち」のところに来てくださったのです。主イエスがわたしたちと同じところに来てくださったから、親しい人のことをわたしたちがよく知ることができるように、主イエスを通して、わたしたちは神を知ることができるのです。だからこそ、主イエスは暗闇で輝く光なのです。

神が分からず、さまよってしまう人の間に、道であり、真理であり、命である方がお生まれになりました。「恵みと真理はイエス・キリストを通して現されます。受肉した御子との交わりがわたしたちにも実現すること、このこともまた、クリスマスの出来事の最上級の喜びなのです。